

---

# MY HAPPY ENDING

こは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MY HAPPY ENDING

### 【Zコード】

Z0463C

### 【作者名】

一は

### 【あらすじ】

二十代も終わりに近付いた江梨は、年下の恋人広海や仕事に忙しくも充実した日々を過ごす。だけどそのバランスが少し崩れると何もかもうまくいかなくなり不安に陥る。最後には自分の本当に大切なものが見える…といいな。

『江梨、今日夕飯一緒に食わない?』

広海からの一本の電話。静かな電話の向こうとは反対に、こっちは鳴りやまない電話のベルや怒鳴り声で聞き取りづらい。

「え? 今日? え~っとちょっと待つて。」

乱雑な机の上で膨大な紙きれに埋もれる手帳を探す。

「あつもしもし? ごめんね。今日は21時すぎなら大丈夫なんだけど…。」

チラ、と左手首に巻きつぶ白いフォリフォリの腕時計に目をやる。あと二時間弱もある。

『そつかあ21時か。ん~まあいいや。待つよ。もう一ヶ月以上会つてねーもん。一時間くらいあつという間だよ。』

なるべく早く終わらせるから、と詫びて携帯電話を切る。

広海は私よりも一歳年下だけど、数少ない私の理解者であり付き合つて四年になる恋人。ギャンブル好きで時間にルーズだけど、とにかく優しくて私を大切してくれる。なくてはならない存在。そして絶対幸せにならなきやいけない一人なのだ。

広海と出会った当時、彼には付き合つて三年になる年下の彼女がいた。仲間内では有名な仲良しカツブルらしく、それを聞いた私は広海を好きになることは絶対ないなと思っていた。だけど意外なほどあつさりと二人は恋に落ちた。

きっかけは一人で居酒屋に行つた時。

なんだかその日は体調が悪く、すぐに酔つ払いそして吐いた。もうすぐ終電の時間になつたので駅に向かい切符を買った。私はJR、彼は私鉄だったので改札で別れることになる。でも、握りしめた切符を改札に通すことが出来なかつた。彼また、別れの言葉を口にせず、私達はただ黙つたまま最終電車を見過ごした。

ホテルに誘つたのは私の方からだつた。別に何かをしようとしていたわけじやなくて、ただ酔いがまわつて気持ち悪くて、とにかく寝たかったのだ。お互い帰らない理由を口にせず、気まずい雰囲気のままホテルに入った。もう一度言つけど、何かをしようと思つたわけじやない。けど、もしかしたらといつ気持ちもあつたのは事実。だけどそんな私の予想は裏切られる。

広海は一切手を出してこなかつた。一つのベッドに寝転がり、私の右肩と彼の左腕が触れるか触れないかの微妙な距離。なんだか全身がヒリヒリする。神経が過敏になつていてる感じ。

私は彼とキスしたいという衝動にかられ、口に出してみた。一瞬動揺したように見えたけど、恐る恐る顔が近付いてきて、軽く触れるだけのキスをした。その時一人の関係が崩壊したみたい。そのまま静かにお互いを求めあつた。

なのにさあこれから一つになりますという時に、広海はできなくなり私に気を遣いながらもその日はそれで終了。後から聞くと、彼女の顔が頭に浮かび罪悪感に堪えれなくなつたとか。理性が性欲に勝る男が、私にとつては初めてだったので感心したのと同時に『絶対射止めたい』と強く思つたのだ。

広海が完全に私のところに来るまでそんなに時間はからなかつた。彼女の気持ちを考えると、私の胸も張り裂けそうになり、やつぱり諦めたほうがいいのか本氣で悩んだ。広海のほうがその思いは強かつたと思う。だけどどうしても私を忘れる出来ないと、最終的に私を選んだ。その時に、安易な気まぐれではなく絶対真剣に付き合つていこうと心に決めた。

《「めんやつと終わった。今から向かいます。」》

手早くメールを送信すると、戦場のような職場を後にする。そう、私にとってここは戦場であり私は戦う侍なのだ。だから戦の後に広海に会えると、ほっとして凄く嬉しい。

いつものダイニングバーで広海は待っていた。21時をとうに過ぎているけど、苛立つ様子はなかつた。

「お疲れっ。今日も戦つてきたね。」

広海の中でも、私は戦う女らしい。

「急に原稿届いたやつでさ、チェックに追われて…」

申し訳なさ気に言い訳を始めるが、すぐに遮られた。

「いいよ。俺も急に誘つちゃつたし。じゃあいつもの頼む?」

いつも、とは私の大好きなパスタセット。自分も何も食べないで待つてくれたのが非常に申し訳ない。でも、

「やっぱり一緒に食べた方がおいしいよね。」

と彼ははにかむ。いつもそ่งだ。いつもはにかんでいる。その顔がたまらなく可愛いと思つ。

「凄い久しぶりだよね。会いたかった。」

私が言うとまたはにかんで、俺も、と言つ。

四年も付き合つていて、まだ新鮮な空気が残つているのは、お互に忙しくてなかなか会えないせいなのか。

広海はCADという仕事をしていて、小さい会社だけどなんでもかんでも引き受けちゃうものだから結局全部押し付けられて休日出勤当たり前の日々を送つている。

私は私で変則的な仕事だから、会えるのは多くて月に一度程度。それもどちらかの仕事終わりにご飯を食べる程度で、家に泊まつたとしても疲れが先に来てすぐに寝るだけ。恋人がいるのに欲求不満力ップルなのだ。だけど浮気をしようなんて思わないしそれ以前に気

力体力ともに無し。広海は若いからわからないけど、してなこと思  
う。

今日もダイニングバーを出たあと私の家に泊まつたけど、やっぱり  
寝るだけ。疲れてるから嬉しいけど、好きだから寂しい。いつも複  
雑な気持ちで寝るのだ。

「片山あー！チェック終わってんのかよー！」

相変わらず鳴り止まない電話が響く中、デスクが叫ぶ。

「終わつたつてさつき渡しましたけどー！」

一瞬だけ顔を向けて怒鳴り返す。膨大な資料に埋もれながら、必死にまとめていたところなので、デスクの勝手な勘違いで思考をストップさせたくなかつた。私は今まさに戦つている最中なのだ。でもやらなきやいけないことはこれだけではない。同時進行で取材や後輩の面倒も見なくてはならないし。トイレにも行きたい。

「先輩、この前言つてた十円まんじゅう買つてきましたよ 食べません？」

こんな状況を見ながら尚美が話しかけてきた。私は頭に浮かぶ十円まんじゅうを振り払いながらひたすら田の前の紙だけを見て、

「いりねーよ！」

と顔をしかめた。それなのに

「なんですかあ？先輩食べたいって言つてたじやないですかー！」

せつからく並んで買ったのに…」

とすつとぼけた声で返された。

並んで？並んで？その言葉に我慢ができず、右手のペンをパン！と机にたたき付ける。

「尚美！あんたねえこのへんせじに時こーーまんじゅう買つ暇あつたら『ハロー』でも取りなセーー！」

振り向きざまに怒鳴りちらすと、はた、と視線が止まつた。時計の針が一瞬見えなくなるほど目眩がしそうになる。

「ヤバイー！もうこんな時間？ー！」

急いで立ち上がる。

「やうですよー。もつお皿とつぐに終わつてゐから、おまんじゅうでもと思つたのこー。」

「今日取材があるんだよー半年粘つてやつとこをつけたアポなのに  
～！」

手帳を探しつつ足元のバッグにテープレコーダなどを雑に詰め込む。  
これが私の悪いとこ。一つの作業に夢中になると時間を忘れてしま  
うのだ。やつと波に乗った原稿もほつたらかして、ボサボサの髪の  
ままタクシーに飛び乗った。

忙しさのピークが過ぎ、久々に時間が空いたので広海に電話をかけた。

「もしもし? ?」

しばらくして電話に出た広海はもの凄い騒音の中にこなづだつた。

「広海? 私だけど何その音? ?」

耳から携帯を少し離して聞く。

「今ね会社の連中と近くで呑んでるんだよ。どうしたの? ?」

だいたいどこにいるのかわかる。私の会社と彼の会社は近くで同じ最寄り駅だから。会いたい、と言いかけてやめた。

「そつか。邪魔して」めんねつ。あんまり飲みすぎなこよつてーじやあ楽しんできてねー。」

もう結構酔っ払ってるらしく、なんで私がかけてきたのか全く気にする様子もなかつた。

じゃあ今日はゆっくり寝るか、と足早に駅に向かつ。途中、何軒かの居酒屋を通りながら歩いていた。

すると次に見える居酒屋の前にいる団体に田が行つた。横を通り過ぎようとするときの中から

「江梨? ?」

と声がした。

「どうしたの? ? 今日はもう帰りなの? ?」

広海は案の定相当酔っ払つていておぼつかない足取りで近付いてきた。そして私に口を開かせる前に、

「そうだ! これから一軒田行くから、江梨もきなよーみんなに紹介したいし。」

と強引に私を輪の中に入れた。

私が

「あつえつ…でも邪魔じゃない?」

と遠慮すると、みんな歓迎してくれたけど、

「いいですよ」一緒に行きましょうよ~。」

と、やたら馴れ馴れしい若い女の子がいた。でも、みんな酔っ払つ

てるんだなあとしかその時は思つていなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0463c/>

---

MY HAPPY ENDING

2010年12月11日02時13分発行